

中川村埋藏文化財発掘調査報告書 第17集

かり や ぼら
菫 谷 原 遺 跡

第1次～第4次確認調査報告書

2005年3月

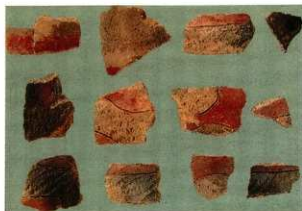
中川村教育委員会



土器棺 2



土器棺 3



土坑 3 出土土器 (線の長さ10cm)



小型杵型土器



動物形土製品



出土土器



一号住居址出土石器

5 cm

例 言

- 1、本書は、平成12年から平成15年にかけて行われた、4次にわたる苅谷原遺跡の学術研究に資する発掘調査報告書である。一部、今回の調査以前の資料も整理し掲載した。
- 2、調査は中川村教育委員会が主体となり行ない、中川村遺跡調査会に委託して実施し、中川村誌原始・古代部門が全面的に協力した。
- 3、本書は、調査の報告に重点をおいた概報にとどめた。調査成果のまとめについては、平成17年度に発刊される『中川村誌中巻』を参照されたい。
- 4、本書の執筆は調査団が行ない、編集は中川村誌編集室が主に担当した。遺物の整理と図版の作成等は太田保が行ない、写真は主に寺平宏が担当した。
- 5、本文中での、「土坑」・「堀」・「溝」・「条痕文土器」など、用語・用字・固有名詞について、なお検討する余地があるが、今後の課題とする。また、火山噴火により生産された軽石・スコリア・火山灰などについては、「テフラ」と記述し、それに砂礫などが混った土壌は「ローム」と記述して、使い分けた。
- 6、遺物・図面・写真等は、中川村誌編集室で『中川村誌』中巻の発刊まで保管し、その後は、中川村歴史民俗資料館に展示・保管する予定である。
- 7、遺構の番号は、第1次調査からの通し番号とした。
- 8、多くの研究者に現地や遺物整理で御教示を得た。氏名は省略するが、感謝を申し上げたい。なお、平成16年1月10日には「広域土器交流を考える会（会長 石黒立人）」との意見交換会を開催した。

目 次

第1章 調査の経緯と方法	2
1、調査を行なう目的	2
2、発掘調査関係者	2
3、発掘調査の方法	2
4、調査地区の層序	3
5、調査経過	3
6、苅谷原遺跡出土土器の年代について	3
第2章 位置と環境	4
1、遺跡の位置	4
2、歴史的環境	4
第3章 遺構と遺物	5
1、遺構	5
2、遺物	12
第4章 まとめ	36
写真図版	37

第1章 調査の経緯と方法

1、調査を行なう目的

苅谷原遺跡は、伊那谷では珍しい弥生時代前期の土器が多く出土したこと、また遺跡の保存状態が良いことから、県の重要遺跡に指定された。

毎年、県の文化財パトロールが実施されており、そのパトロールの折に、畑地や樹園地の深耕により、遺構などが破壊される恐れがあると指摘されてきた。これまで苅谷原遺跡については、遺跡範囲の確認調査も行われていなかったため、遺跡範囲の確認や遺構・遺物の性格の究明を図ることを目的に、耕作者の協力を得て平成12年度から4年間で確認調査を行った。

2、発掘調査関係者（敬称略、年は就任年）

団 長	湯沢 幸雄	(中川村教育長、平成12～15年)
	北村 俊郎	(" 、平成16年～)
調査担当者	太田 保	(中川村誌原始・古代部門専門委員)
調 査 員	唐木 孝雄	(")
	小平 和夫	(")
	北沢 正美	(中川村誌原始・古代部門主任)
	松村 隆	(中川村誌編集委員長)
	寺平 宏	(中川村誌自然部門主任)
指 導 者	神村 透	(日本考古学協会員)
	丸山敏一郎	(上伊那考古学会会長、日本考古学協会員)
	市沢 英利	(日本考古学協会員)
	友野 良一	(日本考古学協会員、平成12・13年)
事 務 局	青木 茂彦	(生涯学習課長、平成12年)
	原 勝一	(教育次長、平成13年)
	石原 直人	(" 、平成14年～)
	栗山 良人	(文化係長)
	伊藤 修	(編纂室学芸員)
	池上 直美	(編纂室事務員、平成12・13年)
	中島 吹雪	(" 、平成14年～)
	斉藤 五月	(社会教育係、平成12・13年)

3、発掘調査の方法

(1) 調査方針

最小限の発掘調査にとどめ、次の事項の調査を行なう。

- ①台地上における遺跡範囲の確認
- ②縄文時代の遺跡と弥生時代の遺跡の分布状況の確認
- ③過去に出土した弥生時代前期の一括土器を伴う遺構の確認と性格の究明

④台地上の微地形と土壌の堆積状況の確認

(2) ベンチマーク設定と基準点 (第2図参照)

台地東方にある土地境界杭(コンクリート製)をベンチマーク(BMI)とし、西方の土地境界石を結んだ線を基準線として、10mのメッシュを台地全体に設置した。

また、BMIから東へ60m(東1、プラスチック杭)、北へ70m(北1、プラスチック杭)、南へ60m(南1、プラスチック杭)、西へ60m(西1、プラスチック杭)方向に基準点を置いた。

(3) 地区とグリッドの名称 (第2図参照)

図面の右から左へA区、B区、C区、D区と4区に大別する。C区はBMIから始まる。1区の間隔は60mである。また、各区を2m間隔に30分割し、「あ」から「ほ」までの符号を付す。

次に、基準線を50として、図面の下から上方向へ2m間隔に分割し数字付す。各グリッド名は、南隅(図面では右下)の杭とする。したがってBMIはC区-あ50である。

(4) 調査

①第1次、第2次調査では表土剥ぎから人力による手作業で行ない、ソフトローム層(以下ローム層と記述する)直上まで遺構・遺物の検出に努めた。遺構は原則として完全に掘り上げず、半分は残すようにした。

②第3次、第4次調査では耕作土を重機で取り除いた後、手作業で調査を行った。

③写真は、デジタルカメラを併用し撮影した。

4. 調査地区の層序

調査地区全体にわたり、過去の桑園と現在の野菜栽培による土壌の攪乱がみられた。

耕作土は20~30cmの堆積で、耕作土の下はローム層となる。耕作土の浅い地域では、桑の植え付け時の溝がローム層内へ入り込んでいた。

ローム層の上面は、かなり耕作の影響を受けており、黒っぽく染み状に汚れ、それが遺構の検出を困難にした。なお、苜谷原遺跡調査周辺の地形・地質については、第1次、第2次調査の概報を参照されたい。

5. 調査経過

藤原宗平氏らによる調査	昭和29年3月26・27日(『上代文化』第25輯掲載)
第1次確認調査	平成12年8月17日~29日(概報発行)
第2次確認調査	平成13年8月17日~29日(概報発行)
第3次確認調査	平成14年8月19日~28日
第4次確認調査	平成15年9月24日~30日

6. 苜谷原遺跡出土土器の年代について

平成16年度、苜谷原遺跡土器着物について、国立歴史民俗博物館により、文部科学省科学研究費補助金学術創成研究費(2)「弥生農耕の起源と東アジア-炭素年代測定による高精度編年体系の構築-」で年代測定が実施された。(注:業績報告は一般図書として刊行予定。)

第2章 位置と環境

1、遺跡の位置

本遺跡は、中央アルプスに源を発し、天竜川に流れ込む与田切川の形成した扇状地の扇中央部に位置している。東側は、南北に活断層が走り、約25mの段差が生じている。この活断層と中小河川の浸食により、苜谷原と呼ばれる一帯は、いくつもの台地が形成されている。

遺跡は、この中でも最北端に位置し、栗生沢川上流の小河川と子生沢川に挟まれた台地部分と、またその南側の小規模な丘陵部分の2ヶ所に立地する。



第1図 遺跡位置図

※太い網線は村境を示す

2、歴史的環境

(1) 苜谷原遺跡の過去の調査

苜谷原遺跡の調査・研究の歴史は古い。昭和9年3月の堤工事の際に、縄文時代中期の土偶が発見された。昭和27年には、藤沢宗平氏らによる長野県遺跡分布図作成のための「上伊那の考古学調査」が行われ、弥生土器が採集された。2年後の同29年3月26・27日の2日間、台地の南東部を中心とする発掘調査が実施され、溝と弥生時代後期の住居址が検出された。

昭和31年に、地主の宮崎氏が11点の完形土器を発見するが、現在では出土した場所と、出土の状況については不明である。

(2) 苜谷原遺跡周辺の遺跡

片桐地区の中でも、特に縄文時代と弥生時代の遺跡が集中している地域である。東側の活断層崖下には、平坦部と湿地部があり、その北側の小高い丘陵部には、弥生時代中期初頭と考えられる原田遺跡（昭和56・57年調査）がある。

第3章 遺構と遺物

1. 遺構

(1) 土器棺墓

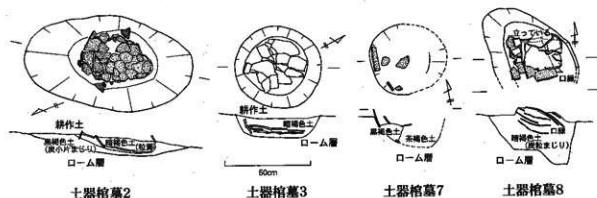
土器棺墓1 か12グリッドの西壁面に一部食い込んで発見された。耕作土の厚さは30cmで、その下はローム層となる。耕作土を掘り下げ、ローム層に到達した時点で、ローム層上面に土器片(第15図1・2)が数点ささった状態で検出され、精査したところ土器が直立して埋められていることが判明し、土器棺墓1とした。

一帯を精査したところローム層の中に炭が点々とあり、土がやや黒味がかっている程度で、土坑状の掘り込みは認められなかった。土器棺の北隣に子供頭大の礫があったが、両者の関係は不明である。この時点で土器棺は取り上げないことにし、断ち割りを行って埋設状況、土器の状況を把握することにした。

土器棺の南半分を断ち割ったところ、口縁部と底部を欠く変形土器が埋設されていた。掘り方としては、土器より2~4cm大きい坑を掘って埋設しており、土器の周りには、やや赤みがかった粘質土が見られた。土器内部の覆土を表面観察したところ、掘り方を埋める土と同じ赤みがかった粘質土であった。

土器棺墓2 か46グリッド東側で発見された。耕作土は25cmで、その下はローム層になっていた。耕作土を掘り下げたところ土器が集中して検出され、一帯を精査したところ南と西側に炭の破片が少なからずあったが、土坑状の掘り込みは明確に検出できなかった。そこで、土器集中一帯を掘り下げ、その結果、口縁から底部まで残存する変形土器が横倒しの状態で埋設されていることが判明し、土器棺墓2とした。その後、土器の取り上げの段階になって周囲を再精査したところ、ローム層に長径100cm、短径60cmの楕円形状の掘り込みが確認でき、土器棺は、この中に口縁部を北東に向け、横位に近い状態で置かれていたことがわかった。

埋設土器は、横倒しの下面の3分の1ほどが残存し、上面は耕作などで削られてしまったと考えられる。また、埋設土器とは明らかに胎土が違う、粗い条痕文が施文されたいわゆる東海系の土器片(第10図一1の2)が、土器棺の口縁部と東側、西側で検出された。口縁部で検出された土器片は、口縁に対して直角に立っており蓋の役割をしたのではないかと考えたが、確証は得ていない。



第3図 土器棺墓

注：縦目は器面の内面を表す。

土器棺墓3 か37グリッドの西側で発見された。耕作土は25cmで、その下はローム層となる。耕作土を

掘り下げて、ローム層に達したところで、土器が数点ささった状態で検出された。土の色調変化は見られなかったが、土器片の周辺を掘り下げたところ、土器が置かれていたことが判明し、土器棺墓3とした。

土器を取り上げ、精査したところ、ローム層に直径50cmのほぼ円形の掘り込みが確認できた。土器棺は、この中に口縁部を南西にして、横性に置かれ、つぶされた状態で検出された。

土器棺墓4 た53グリッドの北側に発見された。台地の中央部に近く、耕作が繰り返し行なわれたが遺構の保存状態は比較的良かった。

土器棺はローム層をわずかに掘り、口縁部を西北、底部が東南向きにし、やや傾斜した状態で埋納されていた。口縁部には別の土器破片(第11図-1の2)が添えられていた。

土器棺墓5 た61グリッドの北側に発見された。耕作の時の深い溝によって遺構の半分は壊されていた。

土器棺は、ほぼ直立に近い状態で埋納されていて、下半部を中心に残っていた。

土器棺墓6 た65グリッドの北側に発見された。土器棺墓5と同様に耕作による深い溝で大部分が壊されていた。

土器棺は口縁部と底部が残されており、残存状態から、横に置かれたものと考えられる。

土器棺墓7 た60グリッドで発見された。遺構のある場所は、東に向かい傾斜が始まる位置にあたる。ローム層を掘り込み、土器棺を直立に埋納したと考えるが、遺構の保存状態が悪く不明である。

土器棺墓8 た64グリッドで発見された。土器棺はローム層を掘り込み、覆土の上部に斜めにつぶれた状態で残っていた。

(2) 土坑

土坑1 直径1mのほぼ円形の土坑である。さ20・し20グリッドで南半分を検出した。北側へ続くが、今回は、南側半分の調査にとどめた。

土坑はローム層へ深さ55cm~70cm掘り込んで造られ、上部は垂直か、やや傾斜の壁をもち、ローム層下25cmあたりから下は、フラスコ状に広がる。底部は平坦であるが、中央部が高く、西側に比べ東側はやや浅く、全体的に硬い。

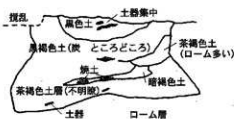
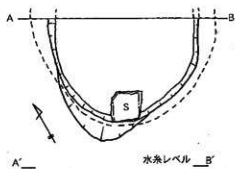
上面は、真黒い感じを持つ黒色土で、炭と焼けて赤くなった石が見られた。中に4か所、土器片が押しつぶされ折り重なった格好であり、完形品ではなかった。黒色土の表面は三和土面の様に堅い。底部上の南端には、25cm程の石が1個あり上面は平坦である。

土坑内の土の堆積状況を観察すると、下層で不明瞭な部分も見られるが、3~4層の堆積で、上層の黒色土と黒褐色土との境は明瞭である。いずれの土層にも土器片や炭・焼土が認められるが上層の黒色土の包含に比べると少ない。なお、黒色土は耕作によりかなり削り取られており、遺構最上面の状態は確認できなかった。

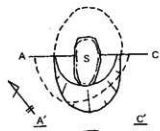
土坑2 わ20・の20グリッドで検出された。長径1.2m、短径0.8m前後の楕円形を呈し、溝状遺構を壊わしている。

ローム層を15cm~30cm掘り込んで造られていて、ゆるやかに傾斜する壁をもつが、北東側はフラスコ状になる。底部は平坦であるが、硬化した面は認められない。

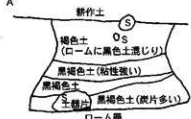
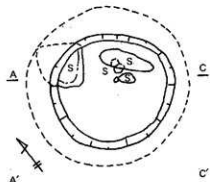
遺物は、埋め戻された覆土中から、磨製石器の一部と考える剥片1点のほか、剥片3点、黒曜石の破片2点と土器破片7点が出土した。



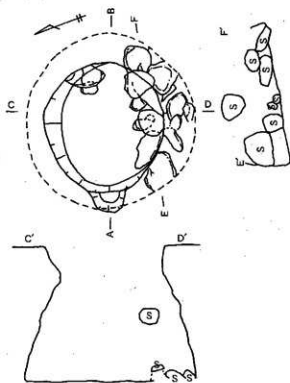
土坑1



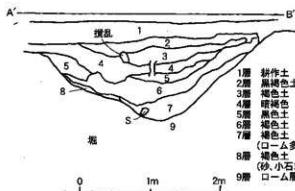
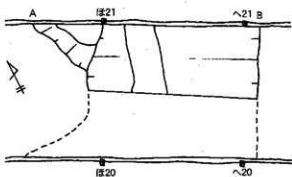
土坑4



土坑5



土坑3



- 1層 耕作土
- 2層 黒褐色土
- 3層 褐色土
- 4層 暗褐色土
- 5層 黒色土
- 6層 褐色土
- 7層 褐色土 (ローム多い)
- 8層 褐色土 (粘、小石まじる)
- 9層 ローム層

第4図 土坑

土坑3 な23・な24グリッドで発見された。ローム層の掘り込み部分で直径90cmのほぼ円形を呈する。土坑はローム層中に約1m掘り込み、底部にいくにしたがって広がり、底部直径が130cmとなる。この形状は、土坑1と類似するものである。

覆土は黒色土（やや黒い程度）とロームの混り、やや軟かい。底部近く（5cm位上面）からは、特に炭が多くみられ、炭は大きな物で15mm位あった。

東側の壁面に付く形で、中間部に小型の自然石と、その上に上面を人工的に割った平らな石があり、石の周辺から少し大きめの土器片がまとまって出土した。また、南側底面には壁面から沿うように自然石が16個不規則に重なって見られた。土坑内の石は、拳大から人頭大で、片麻岩1個を除き、市田花崗岩であった。遺跡の南側の沢から供給されたと考えられる。

土坑全体から170片の土器破片が出土した。土坑上面から土器破片4点、石彫りに近い形の石片1点が出土した。中間の覆土から60点、東壁の、上面を割った石の上から口径28.5cmの変形土器破片（第13図1）など13点、南側石組近くから約80点が出土した。

土坑4 か24グリッドの北側で発見された。長径80cm、短径50cmの楕円形の土坑である。調査は南西側半分にとどめた。土坑はローム層へ深さ40cmほど掘り込んで造られ、壁面は南側で傾斜をもち、ローム層下20cmあたりから下は、全体的にフラスコ状に広がる。底部は平坦である。

土坑覆土の堆積は、上層では硬く粘性の強い暗褐色土で、下層は暗褐色土となる。土坑内の中位層あたりで炭や土器の小片を多く伴った。また、土坑上面のほぼ中央には、長さ40cm、幅20cm、厚さ5cmほどの扁平な花崗岩の自然石が置かれていた。

遺物は条痕文、無文の土器小片を主に18点検出された。

土坑5 か43グリッドで発見された。ローム層の掘り込み部分で直径90cmのほぼ円形を呈する。土坑はローム層中に約70cm掘り込み、底部にいくにしたがって広がり、底部直径が115cmとなる。形状は土坑3と類似し、それよりやや小型である。

土坑覆土は、細かくみると数層に分けられる。上層では、ローム層に黒色土が少し混ざった土質で、色調は褐色である。そのために遺構の輪郭をなかなか確認できなかった。中層になり細片土器が検出され、細かい炭化物の混合するチョコレート土質になり、遺構がはっきりしてくる。底部直上は、黒褐色土で、底部は平坦で硬い。底部北西側には、1辺30cmの四角で厚さ20cm、上面が平らな花崗岩の自然石が置かれていた。

土坑全体から47片の土器片と黒曜石の剥片6点、一部加工痕のある剥片が出土した。

土坑6 か34グリッドで発見された。直径110cm前後のやや楕円形で、ローム層に45cmほど掘り込んでいる。壁面はなだらかで、底部は平である。調査は、南側半分にとどめた。

覆土は暗褐色土の一層で、上面には長さ40cmの自然石が傾いた状態で置かれ、その下には拳大の石と打製石斧の刃部欠損品が重なっていた。また打製石斧の周辺からは、植物の実の炭化物が数十個検出された。打製石斧は、縄文時代中期に属するものである。

土坑7 た51グリッドで発見された。遺構を耕作の深い溝が壊している。遺構はローム層の掘り込み部分で直径約70cmの円形を呈する。深さは約35cmで、底部にいくにしたがってフラスコ状に広がる。

土坑8 た55グリッドで発見された。遺構の東側がグリッドの壁にかかっており、正確な規模や形状は不明であるが、ローム層の掘り込み部分で直径約80cmの円形を呈するものと考えられる。

土坑はフラスコ状に広がり、覆土下層部から多量の土器が出土した。

土坑9 た56から57にかけて発見された。ローム層の掘り込み部分で直径110cmの円形を呈する。土坑は底部にいくにしたがって、ややフラスコ状に広がる。底部までの深さは60cmであった。

土坑10 た62から63にかけて発見された。耕作による深い溝で一部壊されていた。ローム層の掘り込み部分で直径90cmの円形を呈する。土坑の断面はフラスコ状に広がり、底部の深さは90cmであった。

覆土上層には30cmほどの自然石があり、褐色土がのっていた。その下の中層から下層にかけては、黒色土が充てんされていた。

土坑11 た66から67にかけて発見された。ローム層の掘り込み部分で、直径約80cmの円形を呈する。土坑はフラスコ状に広がり、深さ50cmであった。

土坑12 た64から65にかけて発見された。ローム層の掘り込み部分で、直径80cmの円形を呈し、断面は船底形で、深さ70cmであった。

(3) 溝状遺構

第1次調査 B区西端、堀の東側に検出された。ね20～ひ20グリッドをほぼ南北にのび、南の延長は、な18・な19グリッドの溝につながる。

溝は、直線あるいは、わずかに弧状を描き、幅は小さな振幅で広くなったり狭くなったりしている。ローム層を15cm～20cm掘り込んで造られ、壁はゆるやかに傾斜し、底部は平坦か丸くて硬い。砂礫などは認められなかった。

溝の内部を埋める覆土は、黒褐色土とローム層の混じりで、覆土から黒曜石片、緑色岩剥片・打製石斧破片・土器細片が出土した。

第2次調査 か19グリッドと、さ18・19グリッドで溝状遺構が発見されたが、溝の方向と形状から同一の溝である。また、う20グリッドから、お20グリッドにかけて南壁に落ち込みが確認されていて、これへも続くと考えられる。したがって溝は、19列をほぼ直線的に走っていて、西へいくにしたがって、やや台地の外側へ膨らみをもち、更に第1次調査で発見された溝状遺構ともつながると推測される。

なお、昭和29年の藤沢氏の調査で溝が発見されていて、この実測図と今回の溝状遺構とを重ね合わせるとほぼ一致した。

溝状遺構は、か19グリッドでローム層上面での幅140cm、ローム層からの深さが50cm、底部は20cm幅の平底である。また、さ18・19グリッドでは同幅150cm、ローム層からの深さ40cmで、底部の幅は30cmである。か列からさ列へ向い、やや掘り込みが浅くなる傾向がみられた。

溝状遺構は、さ19グリッドで1号住居址と交差するが、東壁の断面観察によれば、1号住居址を溝状遺構が切っていると確認できる。しかし、昭和29年の調査では、「周濠が設けられて後若干の時間を経て、その周濠を切って堅穴住居が営まれた」（『上代文化』）と報告されており、矛盾もみられ、更に今後の調査で注意を払わなければならない。

土器は、か19グリッドで無文を中心に53片、さ18・19グリッドで細い条痕・無文を中心に125片出土した。

(4) 堀

B区西端、へ20・ほ20グリッドで発見された。幅が約2.5mの葉研状の堀で、底はやや丸みをもつが、砂礫の堆積や硬化面は確認されなかった。西側の壁面の中ほどには、中段が設けられていて、若干の砂

礫がたまっていた。

堀の断面観察では、レンズ状の土層の堆積がみられ、長期にわたる堆積で堀が埋まったと思われる。また、東側に褐色土が多く堆積しているのは、掘り出された土が後、流れ込み堆積したものと考えられる。

堀は、地表面の観察ではどの方向にどこまで伸びているのか確認できないが、3次調査で22列では1次調査での方向に対してほぼ直角に曲がって走っていることが確認された。また、南側は沢に面した急傾斜面まで達していると考えられる。

遺物は、覆土上層から底部近くまで、全層に包含されているが、比較的大きな土器片は、上層から中層にかけて多かった。

(5) 住居址

1号住居址 遺跡南側、東西トレンチの、け20から、さ19・20グリッドにかけ検出された。西側のコーナーが確認され、4m60cm×3m70cmの規模であることがわかった。

床面は堅く締って平であるが、柱穴址、炉址は検出されなかった。遺物は、け20～さ20の間で、特に、さ20地点の耕作土中に多く66点が出土した。破片で文様の確認できる遺物は条痕土器である。焼けた礫も多く、黒曜石、剥片の石も出土した。住居址内の覆土出土遺物は、東北壁側に多く50片以上の土器と、石器・動物形の土製品等が出土した。この住居址を弥生時代後期と決定したのは、東側隅のピット状遺構から出土した変形土器である。

(6) 方形周溝墓

え～、59～63の範囲で発見された。周溝の規模は9m×7mの方形で、東辺の中央に1か所土橋がある。主軸はN80°Wである。周溝の幅は50cmから140cmあり、深さは平均して40cmから50cmであった。

主体部の土坑は周溝内のほぼ中央に位置し、長辺が2.5m、短辺は1.7mの長方形を呈し、壁はしっかりしていて断面逆台形であった。底部直上からは、副葬品と考えられる石と石片3点が出土した。

周溝、主体部からの土器片の出土が多いが、周辺にある土器棺墓などの遺構からのものが移動したと考えられる。

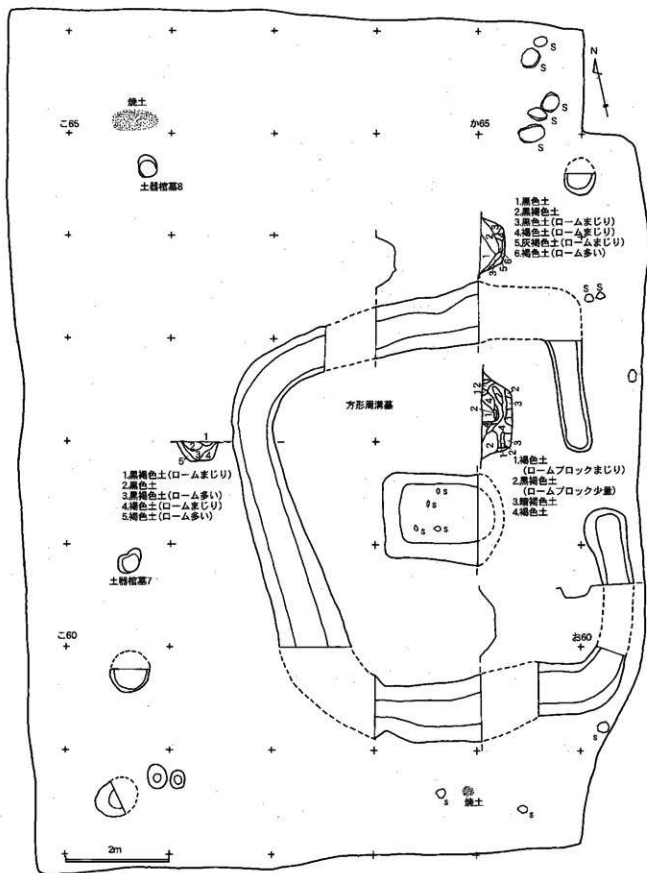
(7) その他の遺構

ピット 調査地区内から、ローム層に掘り込まれた直径30cm～120cmの小規模な穴が多数発見されたので、これらを総称してピットと名付けた。ピットには、遺構であるもの以外に、耕作によるものや、木の根跡なども含まれると思われるが、明確に区別することはできなかった。

す20グリッドの中央部北側に発見されたピットは、60～70cmの楕円形を呈する。桑の深耕で攪乱を受けていた。ピット内部と東側に小礫が見られ、砕けた細片の土器8点、緑色岩で庖丁形剥片1点と、剥片1点、打製石斧の一部破片が出土した。

ぬ20～の20グリッドの間からピットの一群が発見された。焼けた拳大以下の礫が出土した。

な27～30グリッド間に、小型の円形を呈した浅いピットがややまとまって見られた。な32・33グリッド間では直径50cm前後のピットが2か所発見された。南側に自然石2個が、ローム層直上に据えられた形で見られた。な33・34グリッドからは、それぞれ直径1mを越す大型のピットが発見された。



第5図 第4次確認調査 遺構配置図

さ29・30グリッドで、土器片が比較的まとまって出土しており、土坑などの落ち込みがあるか確認をした結果、輪郭が不明瞭で不整形をした深さ10～30cmのビットが発見された。

た59から60にかけて、直径1mを超す不整形の大型ビットが発見された。深さ約50cmで、覆土にロームのブロックが混じっていた。

焼土址 さ33グリッドの中央（焼土址1）と、さ34グリッドの西側（焼土址2）、か51～54（焼土址3）の3か所で発見された。

焼土址1は、ローム層上面に直径80cmの円形で3～5cmの厚さで認められ、焼土中や、その周辺からは、条痕土器の細片や、無文土器の細片が出土した。

焼土址2は、焼土址1から少し離れて、さ34グリッドの西壁で一部が認められ、西側へ広がるが、今回はその範囲を確認しなかった。

焼土址3は、広い範囲で2～3cmの厚さで認められ、土器片などの出土も多かった。

配石 配石1は、さ38グリッドの西壁で発見された。更に西側へ続くと思われる。ローム層へ深さ5cmほど掘り込んだ不整形のビットの中に1辺が20cm～40cmの自然石3個（内2個は、上面が平坦）が置かれ、周辺からも数個の小礫がみられた。焼土、炭、土器等は発見されなかった。

配石2は、た52グリッドの西側で発見された。ローム層を浅く掘り込んだ不整形のビットに、1辺が10cm～30cmの自然石7個と石器1個が置かれた。自然石3個は火を受けていた。

2、遺物

(1) 土器

荏谷原遺跡は第6図の宮崎栄治が採集保管された土器により、伊那谷中央における弥生時代前期の注目された遺跡である。宮崎採集土器には図の1に見られる壺型土器と、甕形土器には3形態以上の形態があると研究者の間で細分化されている。

平成12年の1次から4次にわたる発掘調査で多くの土器片が採集されたが、土器全体の形を残していたのは、土器棺墓に用いられた2～4号と8号の日常煮炊に用いられた甕形土器4個体であった。

①壺形土器

壺形土器は、第6図1の条痕を施文された土器はすでに紹介されていたが、そのほかに第7図47の胴破片と第7図56の口縁部破片の2個体がある。藤沢宗平は『上代文化』に縄文を施文された口縁部から胴部土器を記載するが、現在は所在不明である。第9図47の大型厚手の胴部分の破片があるが、壺形土器を知る資料は少ない。

②甕形土器

荏谷原遺跡出土甕形土器の基本の形態は、口径30cm前後、高さ35～40cm同上部が口縁部幅と同一で、口頭部が縮まり口縁部に外反る形である。ここでは、まず甕形土器を文様を中心にAからFに分類する。

甕形A 藤沢が、『上代文化』に指摘される引楯模様と分類された、細い条線を胴上部から底近くまで施文される。口頭部は篋状工具で磨き無文、口唇部は丸か角状に成形した後に、楕円・丸・刻み・押し引きの加飾をされる。第6図8、第8図1、第10図土器棺2、第23図11など細かい破片が多く出土している。

甕形B Aと土器の形態・口唇への加飾は同じである。口頭部を磨いたのち、縦に条線を施文された第6図4、第9図45、第11図土器棺4のほか、現存しないが『上代文化』巻頭写真左上や、土器棺墓1

の口径40cmの大型甕形土器もこれにあたる。A・B形態の土器は、器厚4～6mmで胎土は細かく硬く締まる焼きで製作されている。

甕形C 器形はA・Bと同一形態である。第6図4の破片があったが、全体の器形をとらえられる個体がなかった。土器棺3の検出から、口縁部破片であった第9図46に、第7図55、第8図2、第9図7など口唇部に楕円や刻みの加飾を行う技法はA・Bと同じである。製作時の輪積跡が残り、雑な筒磨き整形である。なかには口縁に小さい波形・突起を加飾されたものもある。土器焼成など縄文の伝統を受け継いでいる一群で、第23図10の口径22cm高さ30cmや、第8図-1・2の藤沢資料にみられる小形甕もある。

甕形D 第6図2の土器がある。今回の調査では、小さい破片しかない。藤沢資料にも少ない。方形周溝墓敷地内に土器棺が埋納されていたと見られ、破片がこの地区に多い。口頸部のくびれが少なく、胎土が厚めで燻製焼き技法が多い。

甕形E 土器棺墓8・方形周溝墓の周溝内出土・土器棺墓5・6、土坑3・5・8底部から出土した。土器棺8の口唇に刻まれた水式土器の特徴と指摘される加飾や、土坑3・5の甕形土器、土器棺5は荻谷原に見られない新たな模様構成の甕。荻谷原遺跡の本格調査がなされれば、この種の資料は多くなり、荻谷原遺跡の時間幅を決められる土器群ではないだろうか。

甕形F 第23図土坑8底部から出土する6例の口径は13～18cmで胴長である。貝条痕5例、特徴ある筒整形1例の甕形である。既に何点かの口縁部が出土している。口縁部大きい破片は1/2、小さい破片は1/8土器からの復元図、特長のある甕形土器が1か所から出土した。

縄文を施文された土器 第7図1-A地域から縄文を施文された破片が出土する。胎土は細かく雲母を混ぜる焼きの良い硬い土器である。細かい破片が広い範囲から検出し、同一土器と考えられる。縄文を施文されている小形土器、細かい破片であるが土坑3の遺構検出面と底部から出土した第13図2～6、16、21は破片に朱と黒色を塗られた胎土細かく焼成良い特徴ある資料。第23図9、土坑8下層出土は2本の沈線は、先の丸い工具で区劃縄文を施文されている。荻谷原では初見である。

口縁部に突帯を付け楕円・刻み・押し引きの加飾した破片、貝施文具に類する条痕の分類・施文具の復元、大洞類似の模様を施文された土器破片が出土した。

③その他の時代の土器

荻谷原B区からは、藤沢調査でA地点から縄文時代早期と中期の土器が出土した。第2次調査で押型文土器の小破片と摩滅した縄文中期の土器破片が検出した。藤沢調査Bトレンチから灰陶陶器片を採集している。

(2) 石器

石器の出土は、第1次～4次の調査では比較的少なかった。荻谷原の弥生時代に使用されたと決められる石器は出土しなかった。

藤沢調査時、保存されている石器類は短冊形の打製石器が多い。藤沢調査B地点出土磨製石剣1と各地点採集の打製石鏃出土が主な石器である。

第1次～4次の調査からも打製石鏃が検出した。特に第27図3・4・6・7・20・21などは全長2cm以下の小形石鏃である。住居址近くから第15図25の鑿形石器が出土した。

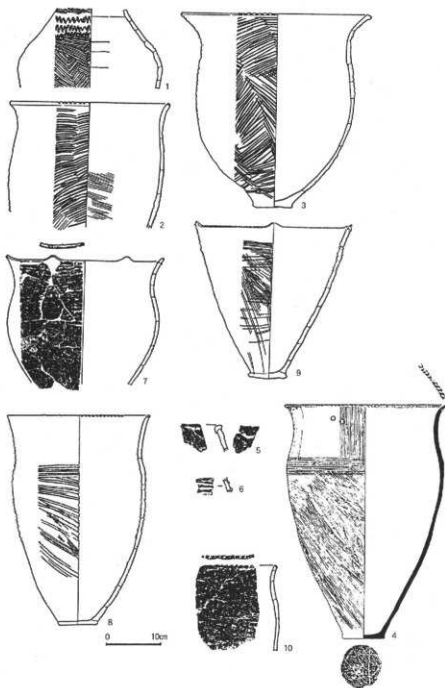
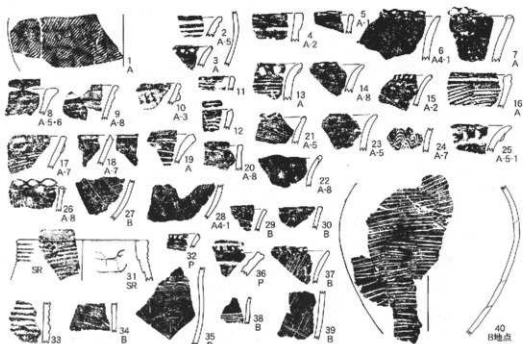
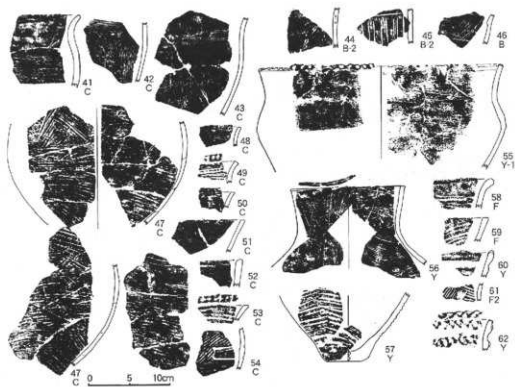


図6 宮崎米治採集・保存された土器 (設楽博己図1/1)

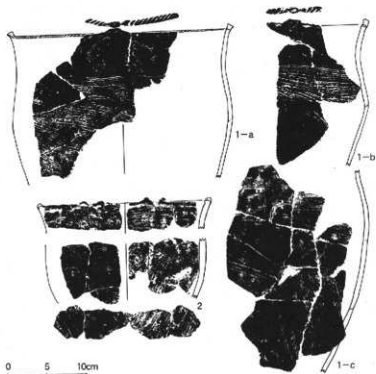


注：記号は『上代文化』のトレンチ名を示す。

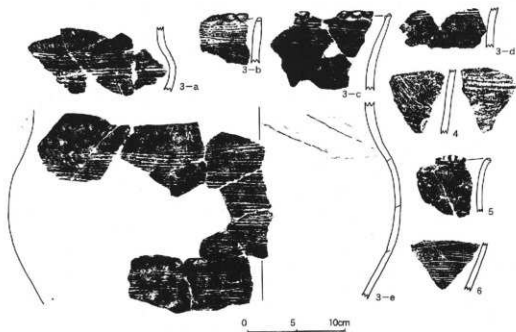
第7図-1 藤沢宗平調査 トレンチ出土土器 (1/4)



第7図-2 藤沢宗平調査 A・B・C・F・Yトレンチ出土土器 (1/4)

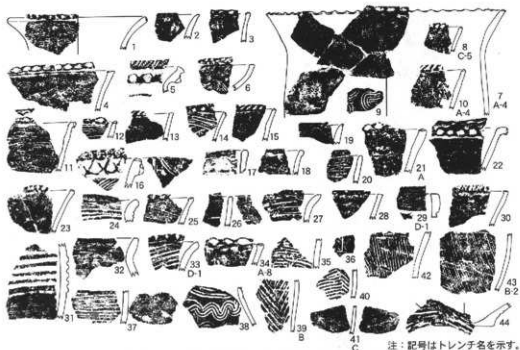


第8図-1 藤沢宗平調査 Xトレンチ出土土器 (1/4)



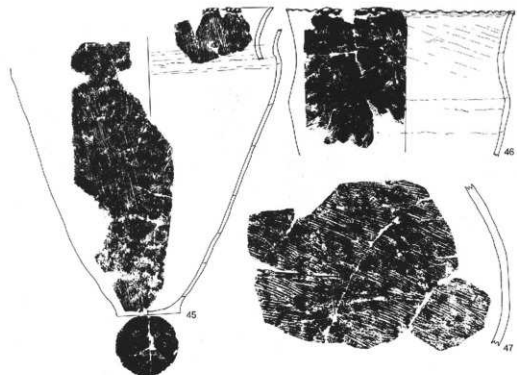
注：記号は同一個体を示す。

第8図-2 藤沢宗平調査 Xトレンチ出土土器 (1/4)

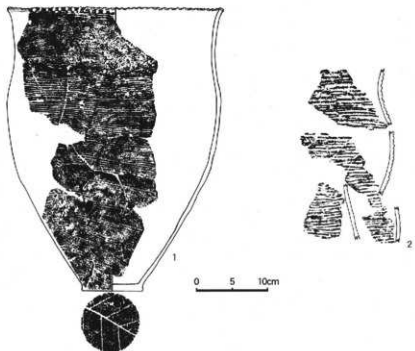


第8図-3 藤沢宗平調査 出土地点不明土器 (1/4)

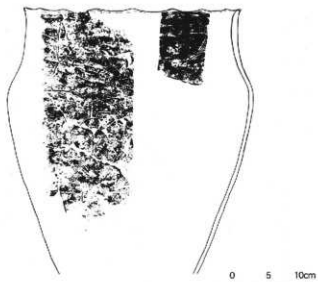
注：記号はトレンチ名を示す。



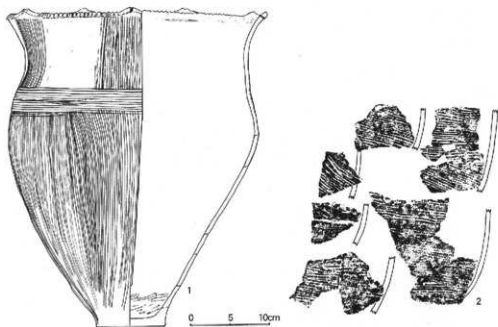
第9図 宮崎栄治採集土器 その2 (1/4)



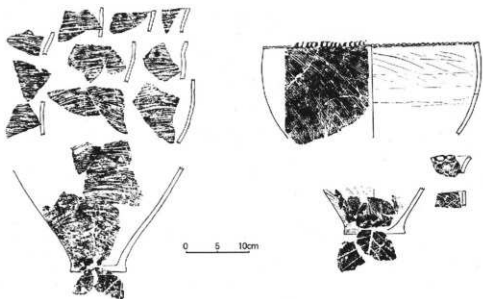
第10圖-1 土器箱2



第10圖-2 土器箱3

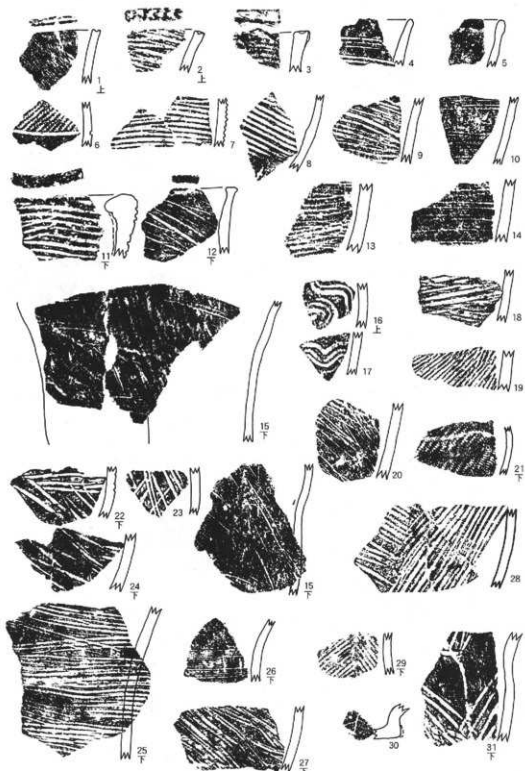


第11圖-1 土器棺4



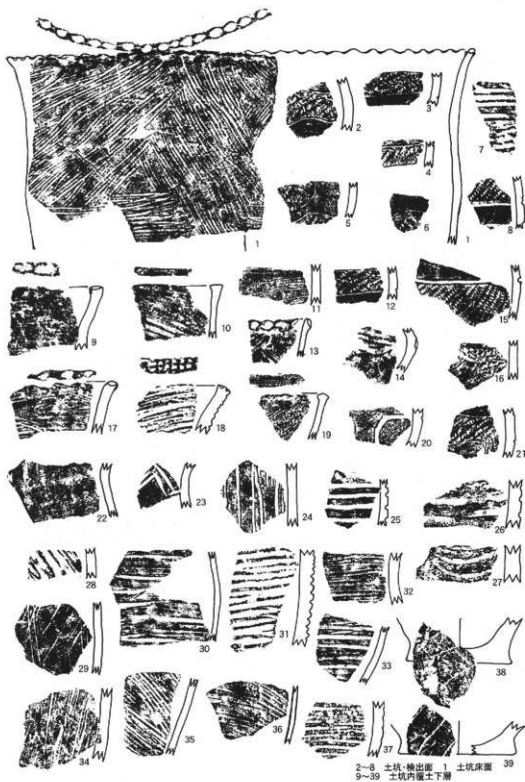
第11圖-2 土器棺5

第11圖-3 土器棺6

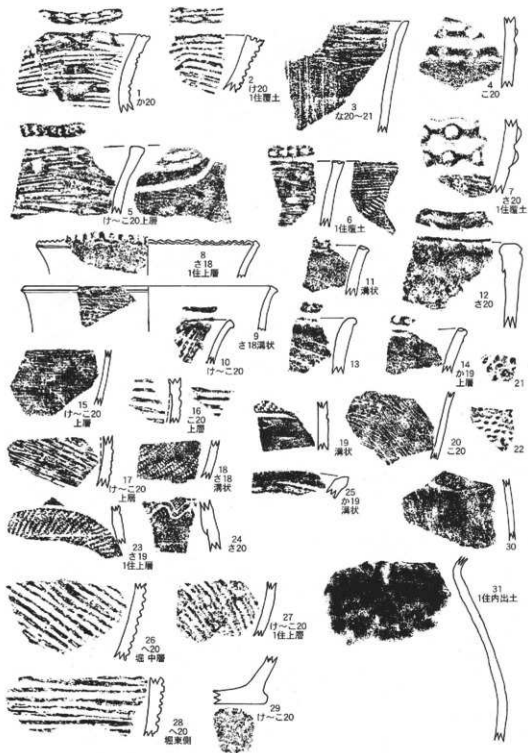


注：「上」は土坑検出面、「下」は覆土下層を示す。

第12図 土坑1出土土器 (1/2)

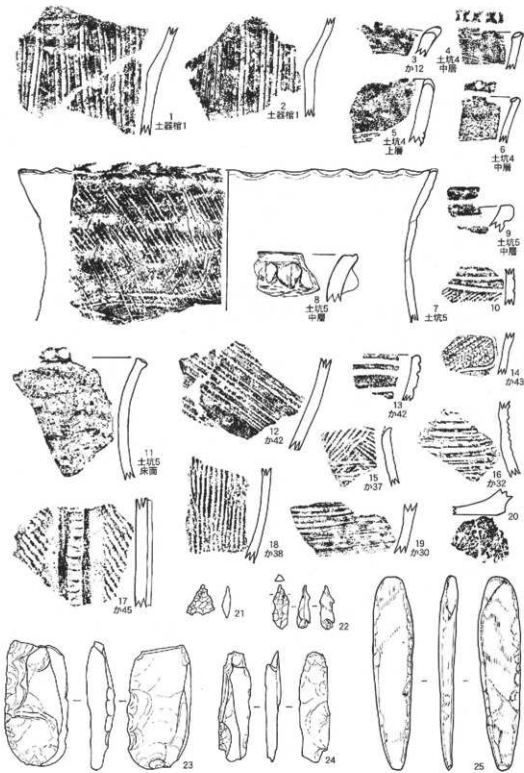


第13圖 土坑3出土土器 (1/2)

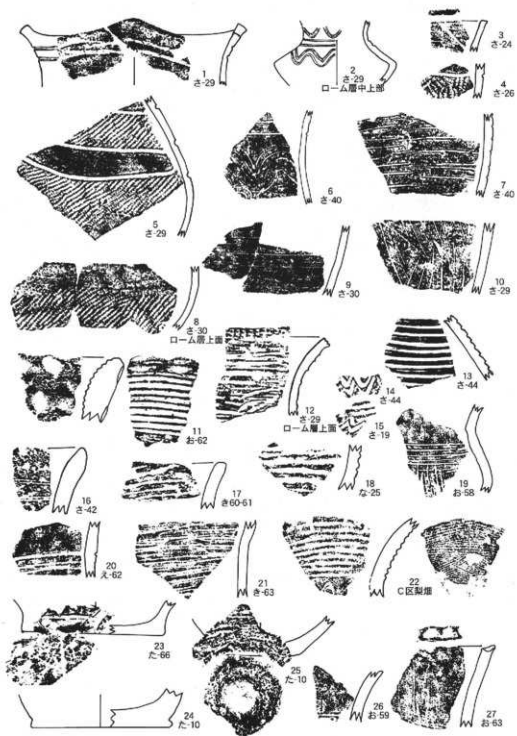


注：「溝状」は溝状遺構を示す。

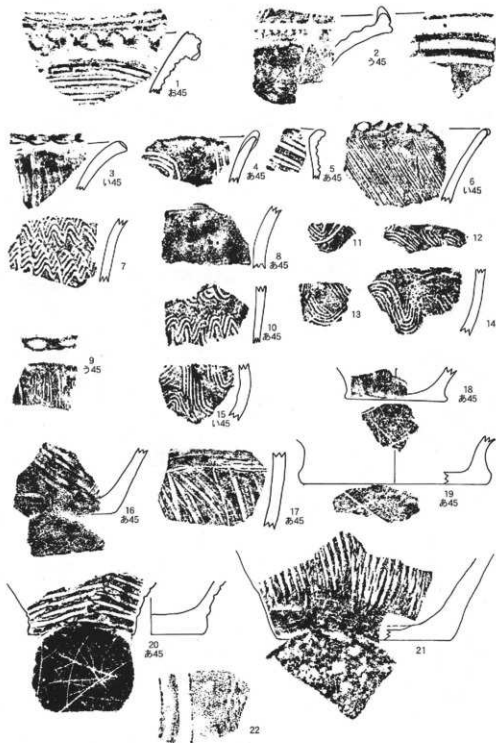
第14図 第1次、第2次調査 1号住居址、甕、溝状遺構出土土器 (1/2)



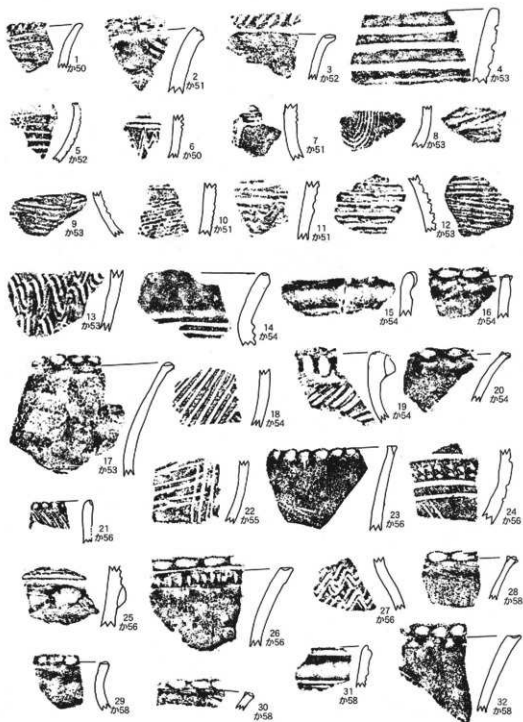
第15図 土器棺1、土坑4・5、か10~45出土土器、1号住居址付近出土土器 (1/2)



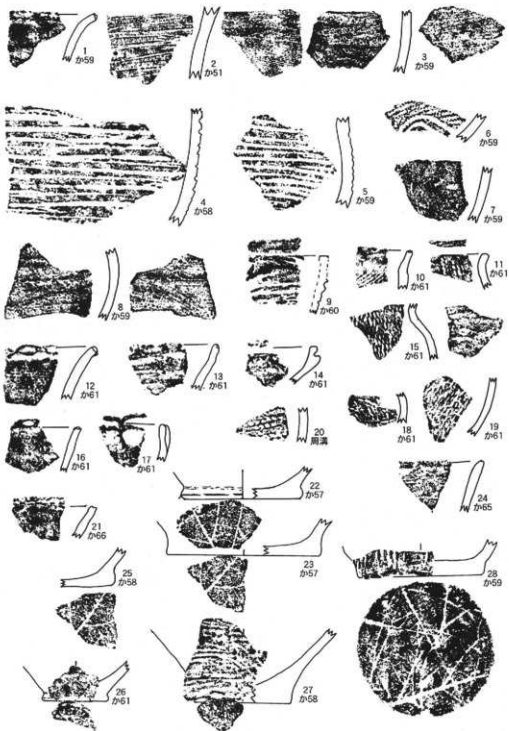
第16図 さトレンチほか 出土土器 (1/2)



第17図 第3次調査B区あ〜お45 トレンチ 出土土器 (1/2)



第18図 第3次調査B区か50～68出土土器その1 (1/2)

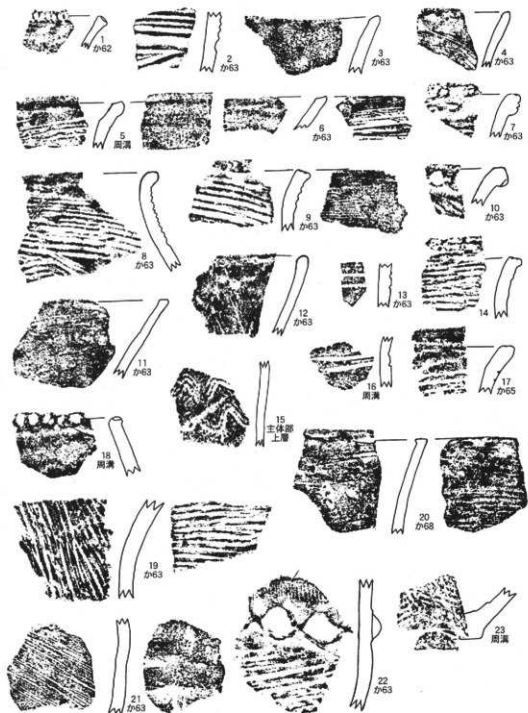


注：「周溝」は方形周溝部の周溝内覆土出土（以下の回版についても同じ）

第19図 第3次調査B区か50～68出土土器その2（1/2）

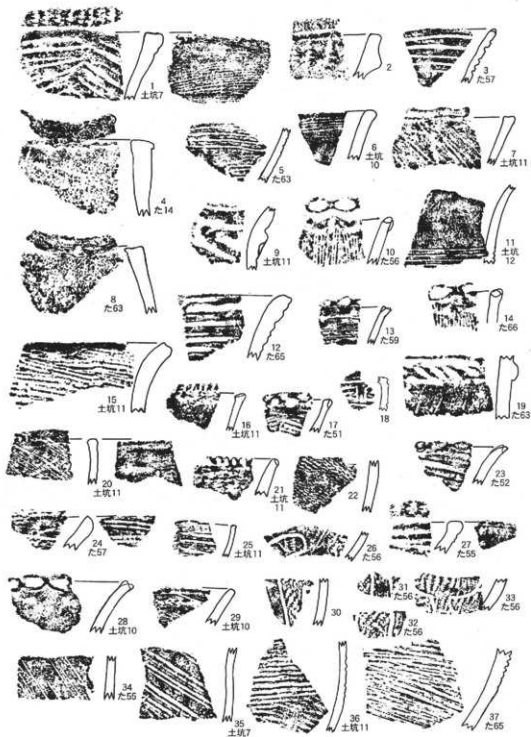


第20図 第3次調査B区か50~68出土土器その3 (1/2)

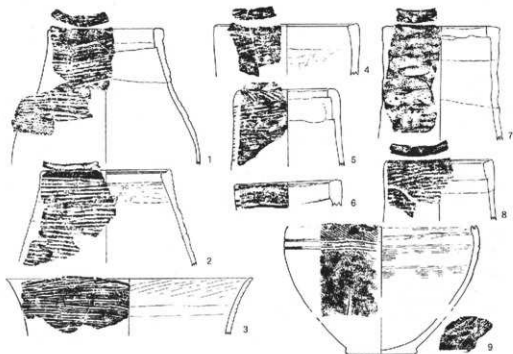


注：「主体部」は方形周溝墓の主体部を示す

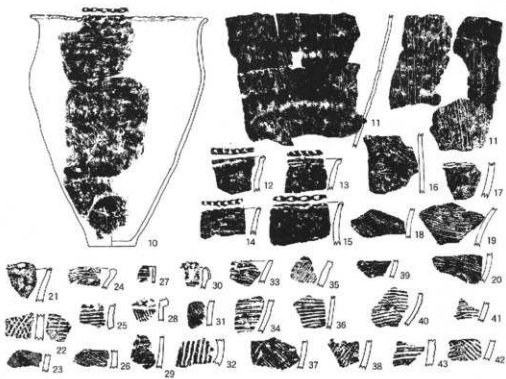
第21図 第3次調査日区か50～68出土土器その4 (1/2)



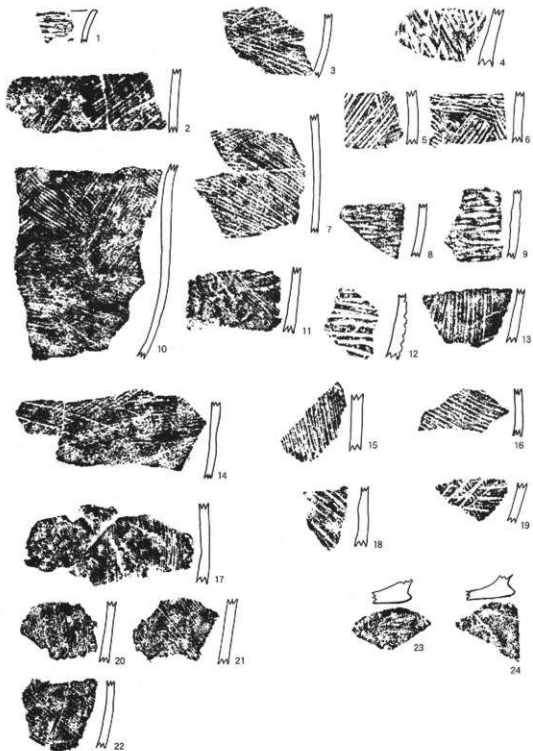
第22図 第3次調査B区土50~66、土坑7・10・11・12・14出土土器(1/2)



第23図-1 土坑8 覆土下層出土土器その1 (1/4)



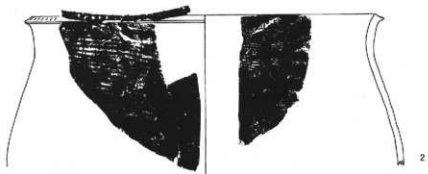
注：10 出土地不明、11~20 宮崎栄治採集土器、21~43 C区果樹園採集土器
第23図-2 宮崎栄治採集、C区果樹園採集土器 (1/4)



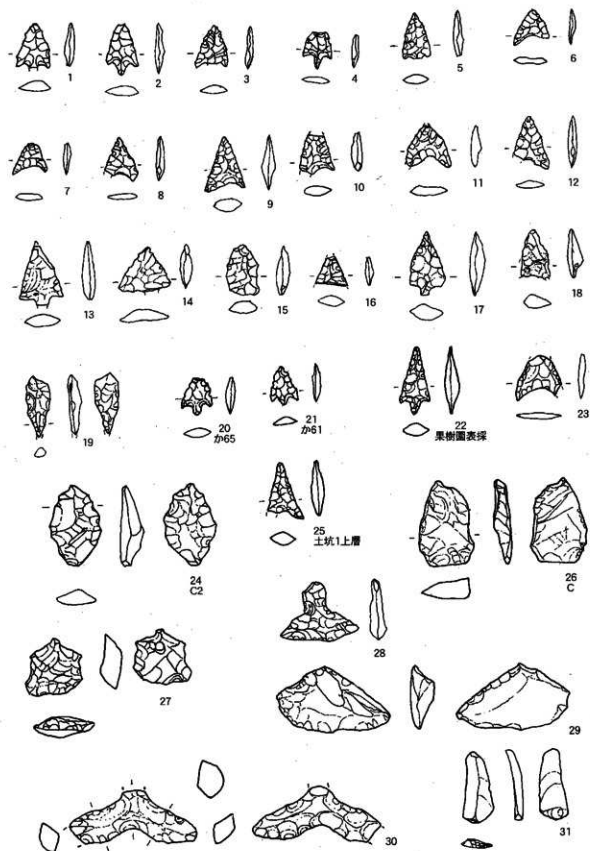
第24図 土坑8 覆土下層出土土器その2 (1/2)



第25図-1 土器棺8 (1/3)



第25図-2 方形周溝墓の周溝(き〜く、60~61)内出土土器 (1/3)



0 5cm

第27圖 出土石器 (2/3)

第4章 まとめ

遺構の分布 東西200m、南北150mの舌状台地の東端部（B区）を中心にトレンチ、グリッド調査を行った。調査面積は全体の約3%にすぎないが、それでもかなり遺跡の性格を把握することができた。

まず、遺構はB区の広い範囲で認められた。B区での遺構の配置状況から推測して、さらに先端のA区へ遺構が続く可能性が高い。またC区は果樹園地帯であり、第4次調査において樹間の坪掘りと表面採集調査を行った結果、西側への遺跡の広がりも確認できた。

B区の遺構の中心は、土器棺墓と土坑である。恐らく台地上には、発見された数の数倍、数十倍の遺構があるであろう。遺構の分布密度は、若干濃い地域と薄い地域と見られたが、台地全体に広がっていると思われる。

遺構の性格 台地上は弥生時代前期（土器棺墓、土坑）から弥生時代後期（方形周溝墓）にかけての墓域であったと考えられる。しかし、台地の南側からは住居址（弥生後期）、溝、堀などが確認されており、台地の南側の一角には生活の舞台があったことも考えられる。

遺構については、他地域の類例を調べ個別に検討することが大事であるが、一方で土器棺墓と土坑との関係、焼土址や遺構近くに据えられた扁平な自然石など、これらの遺構・遺物を総合的にとらえ、今後、墓域としての性格を明らかにしていく必要がある。

遺物 宮崎栄治氏が採集し保存されていた弥生前期の一括土器は、採集された状態が記録されておらず聞き取り調査も不十分の状態であったが、今回の確認調査で土器棺墓8例を検出できたこと、また藤沢調査資料の整理と合わせてみて、宮崎栄治氏資料は土器棺墓の8例に近い状態で採集されたこととみて間違いはなさそうである。

土坑1・3・8号から、細かい破片であるが多くの土器個体が出土した。今後これらの土坑内出土土器や、ほかの遺構から出土した土器の精査を行ない、荊谷原遺跡での土器編年を組み立てる必要があると考える。

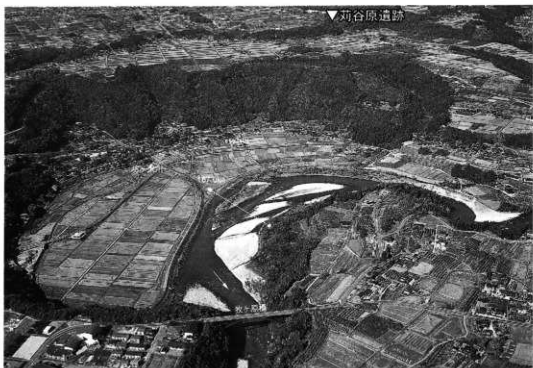
第16図2に見られる小型壺や、各地点から口径20cm以下の小型甕型土器が、細かい破片で出土している。これらは土器棺に用いられた状態ではないと思われる。埋葬儀礼に使用され、その後、故意に細かく割られた容器なのであろうか。

さらに、藤沢氏の調査の折、出土した円盤状土製品や、第1次調査において1号住居址に近い、け20から出土した動物形の土製品など、今後の検討しなければならない資料は多い。

謝辞 最後になりましたが、4次に及ぶ調査でご協力くださった土地所有者の宮崎嘉明氏、JA全農長野様、またご指導ご助言をくださった神村透氏、丸山敏一郎氏、市沢英利氏、県の文化財パトロールでお世話になった本田秀明氏、発掘調査に従事された調査員・作業員の皆様、そのほか調査に関係されました多くの皆様、研究者の皆様に、この場をお借りしてお礼を申し上げます。



東から刃谷原遺跡を望む



南東から刃谷原遺跡を望む (中央部が天竜川)

図版 2



選苗全景（西から写す。調査地区は果樹園の奥）



調査地区（南西から写す）



▲第2次調査 (か20~47トレンチ)

◀第1次調査 (な~ほ20トレンチ)



▲第3次調査現地説明会 (た50~79トレンチ)

▼第4次調査 (方形高溝墓付近)



図版 4



土器棺蓋 1 の付近 (土器棺は奥の中央並ぎわ)



土器棺蓋 1



土器棺蓋 2



土器棺蓋 3



土器棺蓋 4



土器棺蓋 5



土器棺蓋 6



土器棺蓋 8



土坑 1 (遺構の半分を調査)



土坑 2



土坑 3 (完掘)



土坑 4
(遺構の半分を調査)



土坑 5 (遺構の半分を調査)



土坑 8 (遺構の半分を調査)



土坑 8 (上部の出土状況)



土坑 9 (遺構の半分を調査)



土坑 10 (遺構の半分を調査)



堀の断面



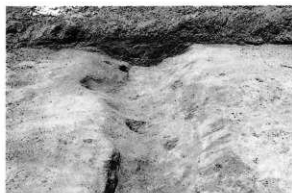
堀の断面 (へ20、ほ20グリッドの北壁)



第3次調査22トレンチで検出された堀(中央部)と溝状遺構(手前)



溝状遺構 (㌥18グリッド)



溝状遺構 (㌥17グリッド)



1号住居址 (第1次調査)



1号住居址
(第2次調査、写真の手前で溝が住居址と接する)



配石 2



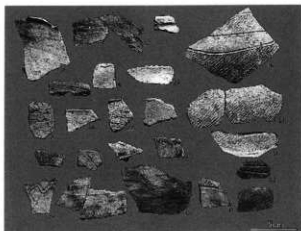
ピット (な32~34)



方形周溝壘



方形周溝壘の主体部

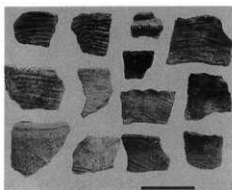


出土土器 (1)

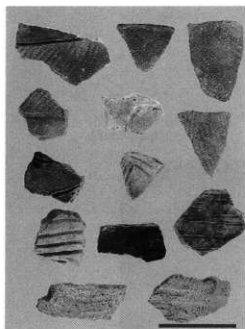
各写真の線の長さは 5 cm



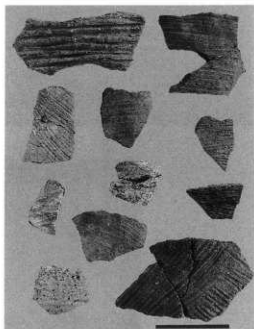
出土土器 (2)



出土土器 (3)



出土土器 (4)



出土土器 (5)

長野県上伊那郡中川村 菟谷原遺跡 第1次～第4次確認調査報告書抄録

ふりがな	かりやばらいせき
書名	菟谷原遺跡
副書名	第1次～第4次確認調査報告書
著者名	太田 保
編集機関	中川村教育委員会
所在地	〒399-3802 長野県上伊那郡中川村片桐
発行年月日	平成17年3月31日

ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
かりやばらいせき 菟谷原遺跡	ながのけんかみいなくん 長野県上伊那郡 なかがむらかたぎり 中川村片桐	203860	1	35° 39′	137° 56′	2000. 08.17 ～08.29 2001. 08.17 ～08.29 2002. 08.19 ～08.28 2003. 09.24 ～09.30	1007㎡	学術調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
菟谷原遺跡	集落址 墓域	縄文時代 弥生時代	土器棺墓 8 土坑 12 溝状遺構 1 堀 1 住居址 1 方形周溝墓 1 ピット 多数 焼土址 3 配石 2	土器 約 4600点 石器 約 200点 動物形土製品 1点 紡錘車 1点		遺跡の保存状態が 非常に良い。		

中川村埋蔵文化財発掘調査報告書 第17集

菟谷原遺跡 第1次～第4次確認調査報告書

発行日 平成17年3月

発行 中川村教育委員会 〒399-3802 長野県上伊那郡中川村片桐

印刷 龍共印刷株式会社 〒395-0004 長野県飯田市上郷黒田121
